

みやまねず

*Juniperus communis* L. var. *nipponica* Wils.

(= *J. nipponica* Maxim.)

ヨーロッパから北米の寒帯に産するセイヨウトンヨウの日本における分化と考えられるもので、本州の中北部の高山帯にハイマツと混生し、高さ1-2m、時には丈低く地に敷くこともある。葉は3個輪生、関節を以て枝と直角につぎ、広線形で長さ1cm内外、上面に強く彎曲し、上面(向軸面)は縁が持ち上がって全体に凹んだ上に中央に溝があり白い。下面は円味を帯び光沢ある濃緑色、果は8mm前後の白粉をつけた藍黒色。北海道から以北には葉が更に強く彎曲した型があり、これをリシリビャクシン(*J. communis* L. var. *sibirica* Rydb.)という。



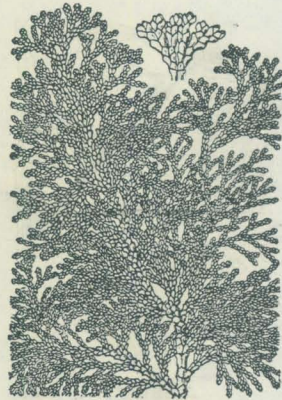
第 3858 図

ちゃぼひば

一名かまくらひば

*Chamaecyparis obtusa* Endl. var. *breviramea* Mast.

ヒノキの園芸変種。高さ5m位になる直幹のもので、多数の枝が水平に短かく出て、密に分岐し分枝が相互に重なり合うに到る。全体細長い樹型が多い。色は濃緑色。正常型では節間に長短があり、分枝は通常一側のみにあるが、この品種では長い節間が短縮し、分枝は両側にある。極めて稀に枝の一部が正常型に還元した例がある。和名は矮鶏檜葉で枝の短縮を鶏で足の短いチャボの脚の鱗にたとえての称か。



第 3859 図

すいりゅうひば

一名えんこうひのき、えんぴひば

*Chamaecyparis obtusa* Endl. var. *pendula* Mast.

ヒノキの園芸変種。本型は前者とは逆に節間が伸長し、且つ枝垂性を附加したものである。分枝も特に長い枝にのみ限られ、他は短枝的存在となる。また気孔帯を示す鱗質物の被覆が相対的に面積をますため、全面淡緑色にみえる。一見類似のものにサワラの同様樹型のもの(ヒョクヒバ)があるが、鱗片葉端の尖り少なく、節間に長短交互する点で識別できる。和名は夫々垂柳、猿猴、猿臂、でいづれも、シダレヤナギ、手長猿及びその腕で、枝の形態をたとえたもの。



ひのき科

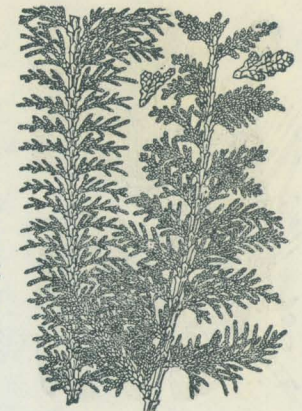
ひのき科

ひのき科

くじゃくひば

*Chamaecyparis obtusa* Endl. var. *filicoides* Mast.

ヒノキの一園芸品。若干の長枝が立ち、それに対する腋生の短枝は正しく対生して生じしかも細かく分枝するが、相互に重なり合うことをしないため甚だ端正な外観を呈する。この形態を孔雀の尾羽の美しさにたとえたもの、チャボヒバの多少とも病的なのにくらべて伸びやかである。通常芽立ちの時に葉緑が欠けて鮮黄色を呈し、後日に次第に葉緑の形成をみて緑化する傾向を伴っている。恐らく芽条変異として生じたものであろう。



第 3861 図

しゃもひば

*Chamaecyparis obtusa* Endl. var.

ヒノキの園芸品の一つ。ヒノキは元来二形葉を交互する背腹性の枝葉をつけるが、往々背腹性を失って、対生の葉すべてが同形となるものがある。葉は夫々背部に中脈を稜状に隆起するため4個集れば4角となり、ために枝は4稜柱となることカタヒバの穂の如くなる。これをカナアミヒバ(var. *lycopodioides* Carr.)という。本品種はそれが更に複雑化して多輪性を生じたもので、従って対生葉がつくところに3-6葉を生じ、全体として甚だ稠密感を生じている。一種の帯化的現象の結果かと思われる。和名は恐らくチャボヒバとの対比としてシャモがチャボより大型の点を買われたのであろう。



第 3862 図

ししんでん(紫宸殿)

一名ほうおうひば

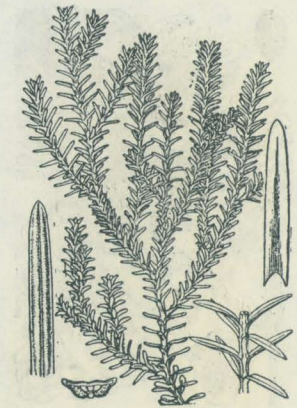
*Shishindenia ericoides* Mak.

(= *Chamaecyparis obtusa* Endl.

var. *ericoides* Boehmer;

*Ch. obtusa* f. *Sanderi* Rehd.)

極めて稀に栽培を見る常緑の針葉灌木、性質虚弱で育ちにくく、高さ50cm以上のものを著者はまだ見たことがない。また花も果実も生じた事実を知らないが、葉の形態の特殊性から1938年に独立の属名を与えたものである。茎は瘠せ、少数の枝を打つ。葉は対生、長さ1cm程の線状長楕円形で無柄、鈍頭、革質で茎に直角につき、葉脚は若干茎面に流れる。暗緑色、中脈が軽く表に凹み裏に凸起、ここに横断面で一樹脂道あり、気孔条なきは特異である。概形はヒノキの初生葉に似た点がある。和名は共に園芸名。



ひのき科

ひのき科

ひのき科